



Title	『三彝訓』における神儒仏一致の思想について
Author(s)	野口, 眞戒
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2017, 51, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/71383">https://hdl.handle.net/11094/71383</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『三彝訓』における神儒仏一致の思想について

野口 眞戒

キーワード…護法論／大我／神儒仏一致／因果説／三教一致

## はじめに

近世日本の儒学者は、概ね排仏論の立場に立っていた。筆者はかつて、林羅山、山崎闇齋、山片蟠桃の排仏論を取り上げ、近世日本における儒学者の排仏論を概観した。その作業の過程で、仏教側から排仏論に対する反論があったことを知った。

仏教側からの反論は、護法論と呼ばれている。近世に著された護法論は多数あるが、その中でも著名なものの一つが『三彝訓』である。

『三彝訓』は、浄土宗の僧侶大我の著作であり、神儒仏融合思想の代表的なものである。しかしながら、『三彝訓』についての先行研究は乏しく、その神儒仏一致の思想について詳述した論文はほとんど見当たらない。

そこで本論文においては、『三辨訓』の著者大我の生涯と、『三辨訓』の内容を概観し、その神儒仏一致の思想の特徴を明らかにしたい。

## 一、大我について

大我についての先行研究は、左記の通りである。

服部英淳「大我上人―紙袋法師」(『浄土』十六―二所収、一九五〇年)

中野三敏「大我狂簡」(中野三敏著『江戸狂者傳』所収、二〇〇七年)

また、大我の伝記としては、

正法寺三十五世呵成「大我上人小伝」(『夢菴戯歌集』所収、宗粹社、一八九七年)

があるのみである。

大我には、近世の僧侶に多く見られる「行業記」に類するような、遺弟たちによる伝記の編纂がなく、その生涯の事績が纏められていない。上記の『小伝』も、ようやく明治期になってから纏められたものである。

ここでは、上記の先行研究に依拠しつつ、大我の生涯を概観したい。

大我は、その自著『阿弥陀経略纂』『性悪論』によれば、宝永六年(一七〇九)の生まれと考えられる。出自は不明で、播州赤穂藩士の妾腹であったと考えられる。

幼児期の大我については、詳細は不明であるが、乳母蓮心によって養育されたことが知られる。

その後、おそらくは七、八歳の頃、自らの意志で出家を決意し、江戸湯島の靈雲寺に入り、慧光に従って出家得度

した。靈雲寺は、五代將軍綱吉の帰依により、一代の学僧浄嚴が開基した真言宗の寺で、慧光はその第二代住職であった。その後十二年間、大我は、慧光の下にあって、仏典、漢籍、和歌等を学習し、併せて、おそらくは真言密教の修行を積み、真言宗の秘法の伝授等も受けたと思われる。

しかし、その勤勉ぶりを同輩から嫉まれ、十二年目にして、止むを得ず靈雲寺を去らなければならなかった。

享保十三年（一七二八）大和吉野の西行庵に入り、ここで三年間修行する。靈雲寺における十二年間の修行が、書物と対峙する学問修行が中心であったであろうことを思えば、吉野における修行は、大自然の中における山林修行が中心であった。『天我上人小伝』にも指摘されているように、「臂を焚き、掌を燈し、皮を剥ぎ、血を刺し、仏に供養し」というような古来山林修行者によって行われていた苦行が実践されたのである。そしてある夜、巖下に疲労困憊した時、神秘体験を得て、浄土宗の念仏の教えに開眼する。時に享保十六年（一七三一）大我二十六歳であった。

その後、諸国を巡った大我は、再び江戸に出て、靈雲寺を訪ねる。旧師である慧光と面談し、真言宗より浄土宗の方が勝れていると断言したため、慧光からは絶縁されることになる。すぐれた師匠を求める大我は、浅草寺に祈り、啓示を得て、鎌倉光明寺の真察僧正を尋ね、弟子となる。以降、延享二年（一七四五）真察が遷化するまで、大我は、真察の膝下にあつたのである。因みに真察は、元文三年（一七三八）に浄土宗総本山の京都知恩院第四十九世法主となり、大我也も随行して、知恩院に赴いている。

真察の遷化の後、大我は洛東に隠遁していたが、請われるままに、山城男山八幡の名刹正法寺第二十二世住職となる。しかし、名利の住職としての日々は、自由を好む大我にとっては、囚われの身に等しく、憂鬱なものであった。

三年間住職の席にあつた大我であったが、ある日ついに我慢出来ず、狂人を装い、庭の大石を投げ、長刀を振り回し、大暴れした。寺内の僧侶たちや檀信徒たちは、恐れかつあきれて、大我の引退を許すに至った。大我は勇んで正

法寺を後にして、洛東岡崎の庵に再び隠遁した。庵は「夢菴」と命名されている。以後、大我は、名刹の住職になることはなく、庵に住んで文人詩友と交わりつつ、著作に励むという自由な隠遁生活を送っている。明和年中には、活動の拠点を京都から江戸に移し、浅草寺の東に庵を結び、「愛蓮菴」と命名した。大我は、天明二年（一七八二）八月十五日に、七十四歳で死去するが、遺言により遺体は綾瀬川に水葬されたという。以上が大我の生涯の概略である。

以上の概略から知られるのは、大我は、既成仏教に所属するものの、その内部に潜む俗物性や、形骸化している諸規制に対して強い嫌悪感を抱いているということである。一方で、同好の文人詩友とは盛んに交際をもっている。また、公刊された四十部以上の著書についても、仏書や儒教関係の注釈書から、戯作的なものまで含まれ、その幅広い教養が窺われる。大我は、身を僧籍に置きながらも、自由と知的好奇心を持ち続けた稀代の教養人と言えるのではないだろうか。

## 二、『三彝訓』について

『三彝訓』は、宝暦八年（一七五八）の序・跋をもつ刊本で伝わっている。『日本思想大系五七、近世佛教の思想』（柏原祐泉・藤井学校注、一九七三年、岩波書店）には、その底本となった原文と、柏原祐泉校注による書き下し文が収録されている。本論文においても、右の日本思想大系本を用いることとする。

『三彝訓』の概要は、その序において大我の弟子田中天理が次のように述べている。

然晚学遞不能容。娟疾其之異已。将詆挫俾 不通者弗亦鮮矣。吾師恪夫弊風。乃撰彝訓。精義弁惑使三如一。

すなわち、神儒仏の後学たちは、お互いに相手の教えを受け入れず、そしり合っているものが多い。吾が師（大我）は、その良くない風潮をただし、神儒仏の三教をして一致させようとしている、と述べている。この趣旨こそ、『三彝訓』の概要と言えよう。

では、以下に『三彝訓』の内容を略述する。『三彝訓』は、遠方より著者大我のもとに訪れた朋と著者大我との問答によって、構成されている。

問答の冒頭は、著者大我が『大学考』という書物を著し、弟子の天理がこれを上梓したいと請うところから始まる。そこへ遠方より朋が来たり、大我と朋とが問答談論するのである。問答は六つある。

第一は、まず朋が言うには、物茂卿（荻生徂徠）の影響により、近ごろの学者は、作詩や漢文の手紙作りや、書画篆刻を為すのみで、道を修めるといふ志がない。それなのに今あなたは、大学の注釈書『大学考』を世に出そうとするが、意味がある事だろうか、と問う。

これに対して大我は、以下のように答える。仁義の道を修めることが儒教の教えであるのに、徂徠は、仁義は聖賢の業であり、われわれが企て及ぶところではないと、狂ったことを言っている。そして、徂徠は自ら儒者と称するが、実は儒道をはばむものではないか。その影響で、今の儒者は、儒風を遠く離れ、道徳を修めず、文章や詩文が上達することを儒学だと思っている。私は仏道にあるものではあるが、先王の教えが世の行われないうことを、黙って見ていくわけにゆかず、かねてより正しい儒教を主張したいと思っていた。以上が、第一の問答である。

第二は、朋が以下のように尋ねる。仏教にも、儒教のような治国斉家の教えがあるのだろうか。或る人が言うことには、仏教は、君臣や父子の道棄てて寂滅を求める教えであり、天下国家を安んずる教えはないということだが、いかがなものであろうか。

大我は以下のように答える。巍巍たる山に譬えられる仏教典籍の中に、どうして齊家の教えがないだろうか。蕩蕩たる海にも譬えられる仏典の中に、どうして人々を養う教えがないだろうか。いまだ仏典の世界へ入ったことのない者が、そのようなことを言うのである。わが釈迦牟尼仏は、悟りを開いた後に梵網經を説き、父母への孝順を勧め、孝を以て仏教の戒律であると教えている。また、入滅の時には、天上より飛来した釈迦の実母に対し、丁重に挨拶している。このように釈迦の五十年間の説法において、仁義忠孝が説かれなかったことはないのである。ましてや国王たちに対しては、優婆塞戒經や王法正理論を説き、仏教の戒律を守ることにより、国が治まり、道徳が保たれることを説いている。仏教は、天下を安んじ、民を安んずる教えである。以上が、第二の間答である。

第三は、朋が以下のように尋ねる。儒教にも仏教にも天下を安んずる教えがあるということだが、神道にもあるのだろうか。太宰純（太宰春台）が、日本は東夷の国であり、天照太神以来欽明天皇までは、天子といえども礼も義もなく、禽獣のような状態であった、と言っている。この太宰の言葉に泥んで、わが神国日本の悪口を言う儒者たちがいる。

これに対して大我は、以下のように言う。小人がどうして神の大道を知ることができようか。孔子ですら母国魯を救おうとしたのに、孔子の教えを学ぶものが、どうしてわが母国に敵対するのか。太宰春台は、わが国における仇である。もし異国を褒めて、母国である日本を貶すものは、神国日本に在るべきではない。海にいかだを浮かべて異国に行くべきである。もしそれができないのであれば、神国を蔑視し誇ってはならない。これが礼を守ることの一端である。

わが日本国は、百王不易の皇統を有する、万代弗革の聖洲である。神武天皇以来累代の聖君賢臣は、史書に詳しいところである。菟道の太子や仁徳天皇の逸話にみえる仁義の行いは、いまだ儒教、仏教の影響の及ばざる時のことで

あり、どうして異国に倣うものであろうか。私が多年、古事記・日本書紀・旧事本紀などの神書を研究するところでは、神の神宣には、一言として治国・齊家・修身・誠意の大訓にあらざるものはない。また、天皇自ら神道・儒教・仏教の三教を立てて、国を治め民を安んじておられるのは、行き届いていて申し分がない。以上が第三の問答である。第四に、朋が以下のように尋ねる。神道は奥深いことである。私も学びたいものである。他日、神道を講習させて頂けないだろうか。

大我は、頷き承諾して、以下のように答える。

太宰春台のごとき輩は、未だ神書を見たことがないので、神道というと、犬のように吠えたてるのである。地位のある君子が、春台を以て賢者となし、その書を信じて、神道を中身の無いものと断定してしまわないことを願う。

続けて大我は、神道・儒教・仏教の三教一致の説を展開するが、これは、次章において考察する。

第五に、朋は次のように言う。過失は聖賢であつてもないことはない。あなたの所説を文章にして出版されたい。神道・儒教・仏教の後学たちに、その過ちを知らしめることになるだろう。

大我は、次のように答える。天下の優れた人は、このことを知らないことがあるか。知っていて言わないのだ。私のような不才が已むを得ずして述べたことで、後世にのぞむことではない。

第六に、朋は次のように言う。いやしい儒者の妖言が、日本国内に毒を流している。この毒を飲んで、間違つた考えに染まるものが多い。あなたの正しい考えを薬として服用し、その間違つた考えを改めさせられるならば、その善い効果は大きいものである。どうか辞退せず、あなたの所説を出版したまえ。

大我は、次のように言う。昔の中国に、伯牙と鍾子期とが志を同じくする逸話があるが、私も志を同じくするものを大切に思う心がある。私は、寇賊を防ぐんとして、筆を執るものである。

以上が『三彝訓』の概要である。

### 三、『三彝訓』の神儒仏一致の思想

前章で述べたように、『三彝訓』の神儒仏一致の思想は、第四の問答の中において述べられている。

その個所は、太宰春台を批判した後にある。大我は、ここにおいて「禍福自生」を説く。

禍福自生者何。福善禍惡以彰其德。是天之道也。

禍福自ら生ずとは何ぞ。福は善により禍は惡により、以てその徳を彰す。是れ天の道なり。

つまり、善を為すものは、必ず幸福を得て、惡を為すものは、必ず禍を受けるということになる。例えば、瓜を畑に植えれば、必ず瓜が成るし、瓢を植えれば、必ず瓢が成るようなものである。これが「天の道」であると言うのである。大我は続けて述べる。

然庸人未嘗識天之所以冥報之。且謂是善而為惡者不亦鮮矣。於是乎仏神聖賢深憫其禍。出御三国垂教万世。使人由是而解惑也。

然るに庸人、未だ嘗って天の冥に之を報ずるを識らず。且つ是を善と謂ひて惡を為す者、またすくなからず。ここに於いて、仏、神、聖賢、深くその禍を憫みて、三国に出御し、教を万世に垂れ、人をしてこれに由りて惑を解かしむ也。

しかるに、凡人は「天の道」を知らないのです、過ちをおかすものが少なくない。そこで、仏陀や、神国の神々や、儒教の聖賢が、印度・日本・中国にそれぞれ出御したまい、教えを万世に垂れて、人々の迷いを解かれるのである。

大我は、仏陀や神国の神々や儒教の聖賢たちを、「天の道」を知らずに過ちおかす凡人を憫れんで現れた存在と捉える。続けて次のように述べる。

是以、三教雖殊途其歸一也。所以勸善懲惡而正人心也。三道之學者、鼎立各嚆矢于万邦使人止惡修善則可以安天下矣。

ここを以て、三教、途を殊にすと雖も、その歸、一なり。善を勧め悪を懲して人心を正しくする所以なり。三道の學者、鼎立して各々万邦に嚆矢して、人をして悪を止め善を修せしめば、則ち以て天下を安んずべし。

こういうわけで、神道・儒教・仏教の三教は、その方法はそれぞれ異なるといえども、論じつめると同一の事柄の現れにすぎない。それぞれの教えが、善行を勧め悪行を懲らすゆえんである。神道・儒教・仏教の三道の修学者は、鼎の足の如くに立って、すべての国々において始まりとなり、人々を止惡修善に導けば、天下は安泰となるだろう、という趣旨である。

大我は、続けて以下のように言う。ところが、昔から今に至るまで、神道・儒教・仏教のそれぞれの修学者は、義理の根源を深く掘り下げることが出来ず、他の教えを嫉み憎んでいる有り様である。三つの教えは、これがためにながりをもち、交わることができない。なんと悲しいことだろうか。

続いて大我は、『先代旧事本紀大成経』より、三教一致の典拠を引き、聖徳太子の説であると述べている。しかし、『先代旧事本紀大成経』は、聖徳太子の作と言われながら、実は江戸時代の禅僧潮音の偽作であるとされているものである。今、筆者は、この『先代旧事本紀大成経』については、後日改めて考察し、論究したいと思っている。従って、大我における『先代旧事本紀大成経』からの影響については、後日の考察に譲ることとした。

以上で、大我の『三彝訓』における神儒仏一致の説を概観したが、その結果、以下のことがわかる。

大我によれば、「禍福自生」が「天の道」である。「禍福自生」とは、善行が幸福の因となり、悪行が禍の因となるという因果説である。この因果説こそが「天の道」であり、神道・儒教・仏教の根底に共通して存在するものであるとしている。神道・儒教・仏教の教えは、「天の道」を知らず迷っている人々を救おうとするもので、日本・中国・印度の三国において各々始まった教えではあるが、その根本は同一のものであるとしている。

従って、三教は、各々の相違点を攻撃することを止めて、その共通点について認識し、鼎の足の如くに立てば、天下は安泰になるといふものである。

### むすび

大我の『三彝訓』における神儒仏一致の思想の特徴を考察すれば、その中心には、因果説を三教共通の教えと捉える考え方があつた。因果説は、仏教の基本的な教説である。従って、大我の三教一致説は、仏教的三教一致説といふことができる。

また、幅広い教養人である大我は、神道についても大変造詣が深いことがわかる。特に『先代旧事本紀大成経』に よりどころを求めていることから、仏教的習合神道の立場にたつてることが推測される。

『三彝訓』における大我の三教一致説には、三教それぞれの修学者が、その排他性を止めて、それぞれの教えの基底にある「天の道」に気づき、三教鼎立して、天下を安定させてほしいという願いが込められているように思われる。この願いこそ、既成のものの方や立場にこだわらない、大我ならではのものであると考えられる。

最後に今後の筆者の課題としては、『先代旧事本紀大成経』の成立とその影響について精査することが挙げられる。

また、中国における儒教・道教・仏教の三教一致説が、大我に与えた影響についても考察したい。

(大学院博士前期課程修了)

## SUMMARY

Philosophy of Fusion of Shinto,  
Confucianism and Buddhism in “San-i-kun”

Shinkai NOGUCHI

In this paper, I discuss a philosophy of Fusion of Shinto, Confucianism and Buddhism written in “San-i-kun”.

In early modern Japan, many Confucian scholars reproached Buddhism in their books. About this, Buddhists wrote books about protection for Buddhism. “San-i-kun” is the most famous book of these Buddhist books.

It was written by Dhaiga (1709~1782), a Buddhist monk. He was a member of Jyobo sect. There are few biographical data about him, and little is known about him. However, there is no doubt that he was an earnest trainee monk, and a man of fine breeding. Also, he had free thinking and disliked existing bindings. He published more than 40 books, and he wrote not only authoring about Buddhism and Confucianism, but also entertainment books.

Below is his suggestions in Dhaiga: Good behaviors bring happiness, bad behaviors cause evil. Shinto, Confucianism and Buddhism have this idea in common. However, many people don't realize this, and experience a disaster as an effect of bad behaviors. So, Shinto in Japan, Confucianism in China and Buddhism in India, are made in order to lead people to right way. Accordingly, their core ideas are same. When they stop reproaching of differences and acknowledge the common point, peace will come.

This idea is a philosophy of fusion based on Buddhist teaching, 'Inga'. He also well understood about Shinto and Confucianism. It seems that his philosophy represents his hope that the 3 religions will realize their exclusiveness are wrong and peace will come in the world.